

『ダブルフェイス』

久間十義(著)／幻冬舎
1800円＋税／2000年5月

『東電OL殺人事件』

佐野眞一(著)／新潮社
1800円＋税／2000年5月

事実と真実の間

坂田三允(長野県看護大学)

つい先頃、といってももう2～3か月前になるが、世にいう「東電OL殺人事件」の容疑者に無罪の判決が出た。検察側はこの判決を不服として控訴し、東京高裁はそれを受けて容疑者の身柄を再度拘束することを決定した。事件が発生した当時、被害者がエリートOLでありつつ売春をしていたということから、その昼の顔と夜の顔のあまりの落差が世間の眼を引いて、被害者であるにもかかわらず、殺されたOLにまつわるヒステリックな報道がしばらく続き、うやむやのうちに世間から忘れられていったあの事件である。

私はこの事件にそれほど興味があったわけではない。というよりも、マスコミの事件の取り上げ方に腹を立てていた。人は誰でもいくつかの顔をもっている。そのいくつかの顔を使い分けて私たちはバランスをとりながら生きている。確かに売春という行為は世間に堂々と胸をはって公言できるものではないかもしれない。だからといって、彼女の私生活のすべてを暴く必要があるのか。エリートOLと売春の落差が問題というのなら、それを買う人々に落差はないのか。彼女だけではなく買春をしている人々の中には彼女以上にエリートと呼ばれるような人がいるのだから、そういう人の全裸写真も掲載したらいい。そんなことを考えていた。

だからこの2冊の本を手にしたのは事件への興味からではない。『ダブルフェイス』を読みたいと思ったのは週刊誌の書評に、警察用語がふんだんに使われ、警察内部のことがよく描かれているとあったからである。帯封には「彼女

は何者だったのか」「警察内の派閥争い、政財界のみみ消し工作に抗して、地を這う捜査を繰り広げる捜査本部が直面した、都市に生きる者の底なしの心の闇」とあった。

そして『東電OL殺人事件』の方は書店で『ダブルフェイス』のすぐそばに平積みされていて、帯封に「彼女は、心の迷宮で死んだ」「被害者の底無き心の闇と警察捜査の信じ難い虚妄を強烈に照射」とある。同じテーマが小説という手法で表現される場合とルポルタージュというジャンルで表現される場合の違いを比べてみたいと思ったのだ。

両者を読み終えて、私は内側からみることと外側から眺めることの違い、事実と真実の違いのようなものをあらためて感じた。小説は虚構だ。表現されていることは事実とは異なる。とわかりつつ、その世界に入り込んでいる自分がある。ルポルタージュはその書き手のスタンスが反映されるとはいえ事実が積み重ねられていく。精神科医へのインタビューを通して語られる彼女の「心の闇」にはそれなりの説得力がある。けれども「他人の痛みを自分の痛みのように感じることなんて不可能なのだ。だから、せめてその痛みを、心の疼きを、人はアタマで理解しようとする」という『ダブルフェイス』の登場人物のこぼれに私はとても共感していたのだった。

事実を通して私たちは対象を理解しようとする。けれども真実は結局のところ理解しようとしている私にとっての真実にしかすぎないのではない。そんな気がした。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手。東京大学医学部附属病院(精神科婦長)を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694